第　3　部

存　　在

第　1　章

世界の超越性と思想

11-001

存在と空間、時間に関しての問い。

私にとって根本的と思われる問いであるが、これらの問いにとって回答が可能かどうかは解らない。
問い自体が的外れである可能性さえ否定できない。

1. 存在と空間は不可分のものなのか？
それとも、存在と空間は1対Nの対応があり、空間は存在の存在化の一形式、一地平なのか？
空間以外の地平－形式においても存在は存在化し得るのか？

2. 世界－内－存在としての存在物は空間を占有するのか？
つまり、存在物の空間への不可侵性との関係はどうなのか？

3. 空間を世界－内－存在物は共有することは出来ず、必ず境界面で境界付けられているか？
排他的占有は存在物と空間との関係において、どういう本質的なことが存在するのか？

4. 存在物の唯一無二の固有性と、空間の占有、排他性、ここに存在の大いなる謎があるように思えるが、
その辺に関してはどうか？

5. 空間が存在を受け入れ、存在化の固有性が、空間と存在との特殊な関係形式の内で世界を表象する
ものと考えてよいか？

6. 存在しているということは、存在物は固有の世界空間、占有空間を付与されて存在化されている
と考えてよいのか？

7. . 存在には、その地平的形式から考えて、定数という固有値と一対一に対応すると考えることには
矛盾があると考えるが、どうか？
次元的に凝縮した場合に、相転移後の安定性の中に一時的に現象する或るものと考えるが、どうか？

8. 時間というものは、空間と同じく、存在の属性としての顕れということなのか？

9. そもそも時間は、存在との関係において、どのように定位すべきものなのか？

10. 意識は存在化、顕現化と同時に存在の属性が存在物に付与されたものなのか？
また、意識は存在とどういう関係にあるのか？存在が存在物に付与したものなのか？
あるいは、存在物から創発されたものなのか？

11. 先端物理では、空間は、生成・消滅する創発的でホログラフィー的なものと、最近考えられているが、
それに関してはどうか？

12. 宇宙の膨張と言った場合は、空間の拡大、空間の存在する境界面（境界域）の拡大と考えるが、
その境界面の外側には空間が存在しないということになるが、そうすると存在と空間は不可分の
関係ではないことになるが、存在の顕現化は特に空間のみ空間だけを必要とすることにはならない
と思うがどうか？
空間のない存在は有り得るか？

13. 現代物理では、10次元バルク空間に無数の10－N次元空間が浮かんでいると謂うが、人間の感性
では想像するのに困難である。まず次元間境界はどのようになっているのか？
次元間境界の接続は存在するとして、どのようになっているのか？

14. 存在の存在化の無限の可能性から、傾向性から、共在可能性の条件を潜り抜けた或るもののみが
存在化し、顕現され得ると考えるが、どうか？

これらに対して近代以降においては、スピノザ、ライプニッツ、カント、ニーチェ、ベルグソン、ハイデッガー、
ウイトゲンシュタイン、・・、それからボーム、アインシュタイン、現代の先端物理（超弦、M理論、ﾄﾎﾟﾛｼﾞｰ理論
・・・・）・・・・等々が、各々の自説を展開しているが、各々がどういった回答を与えているかを論じるには、
とても紙数がたりない。
私は彼らの著書を読む限りでは、どれも一長一短、明確に断言できる思想家や思想は皆無であると考える。
むしろ、例えば、ヤスパース、やウイットゲンシュタインのように、そこには超えられない限界があるとする
方に真実味を感じる。

11-002

世界は徹頭徹尾、時間そのものであり、存在と時間は不可分である。　という私の考え。

時間は、簡単に言えば状態遷移の差分の内的認識である。
状態遷移の生成とその展開そのものが存在の地平そのものであり、世界地平そのものが存在化し、存在を自己展開していく世界、自己展開しながら「存在と存在物」という場合の存在の地平が支配している世界に我々は存在する。

我々は状態遷移への先行的な配慮ー意志ー空間のなか、やってくる現在、つまり未来への準備、手配、配慮への手順の空間のなかで、内的な構成化を行っている。

時間というものが客観的に存在する訳ではなく、存在は時間が存在するかのように、存在は止むことなく展開していくものであり、その意味では時間は存在そのものの属性である。

我々が外界認識するときの最も重要な感性は視覚であり、まず外界を視覚化する、つまり空間的描像を描く、そして自己の組織系としての肉体との空間的比較により、対象の空間的構成を行う。
そのように、感官のもつ情報認識の形式に依存している。
感性と直観で認識できない場合は悟性による推測を行う。このときに概念と後験的知識を使う。

情報認識は、情報接続が成立していることが前提であり、感性の形式（次元）と、受信能力の範囲内に射影されたものと境界を介して接続し、それが直観と共鳴し直観が作動可能になった場合に「接続された」ということになる。
よって我々は、感性と直観の有する情報接続のための受容形式（次元）によって外界を認識するため、我々の世界は感性ー直観ー形式に着色されているところの内的世界を創出している。

・世界展開の最前面において、過去の因が現在を因が導く必然性により現在を有らしめている。
つまり、現在の因が生成する現在の果を有らしめる。
未だ無いという世界への存在の存在による存在展開であり、その存在展開を我々は時間と称して抽象し概念化している。
そういう意味において時間は概念としてある。生成の展開を感性ー直観ー世界に射影したホログラフィックなものである。
存在の世界展開が、我々に投影することから発する時間という概念の創出である。

・存在化された世界ー内ー存在においては、純粋（存在そのもの）、無色、は存在化され得ない。存在化と同時に存在は着色する。
そういう意味では、ベルグソンの謂うところの純粋持続はあり得ない。
それは、存在化される以前の存在を表現したものであると解釈する。

・存在は、存在物すべてを巻き込んで存在化を展開する。その展開が我々の心象に射影したものが時間である。そして我々、感性と直観を備えた奇妙な情報的ー構造体が、その展開の世界面上に立っている。

・厖大な情報を吐き出しながら世界展開を行っている（過去）。そして吐き出された全情報が世界ー展開の先端面上に顕れながら（現在）、展開を行う。

・存在ー展開は「現在」の情報をすべて飲み込んで存在化、生成化のために費し、それを排出し、その排出されたすべての情報が、世界ー展開ー面の先端面に凝縮した相転移ー形式として顕れ、それが「現在」の情報と絡み合い、畳み込まれ、増大していく。
そういう形で進んでゆく。
だから、「過去」は、つまり展開された情報は限りなく永遠に増大する。過去は永遠になる。

・世界ー内ー存在　としての存在物は、存在の地平ー形式の展開の素材としてある。という世界に存在している。存在物は、「存在そのもの」の射影を具有しているが、その超越的構造である境界に閉じ込められた存在物には情報接続の境界、接続限界としての境界がある。

この限界に関しては、ウイットゲンシュタインが、「論理哲学論考」において書いている。
だが実存はこの限界の認識から始動するのである。

4.114　　論理哲学論考から
「哲学は思考可能なものの限界を定め、それにともない思考不可能なものの限界を定めなければならぬ。哲学は思考可能なものを通じて、思考不可能なものを内側から境界づけねばならない。」
4.115
「哲学は語りうるものを明晰に表現することによって、語りえぬものを示唆するに至る。」

・存在は、存在化中すなわち存在化の展開中であるところの「現在進行」形であることによって存在なのである。 そのため、人間の謂うところの時間という概念は存在の顕れであって存在と不可分であり、それなしには「存在」足り得ないのである。

・存在の存在化への無限の可能性の中から、必然的にか自発的にかは解らないが、結果的に選択されたこの世界ー形式は、他にもあり得るだろうと思われる数多の地平ー形式の一つだろう。
だから、世界ー内ー存在としてのすべての存在物はその地平にある。それは一種の、形式ー地平の凝縮による相転移という様なものなのかも知れない。
だから、世界ー内ー存在のすべては、存在のその形式に凝縮した無限の属性が内在している、と同時にその形式ー地平の超越的構造の中にある、一種の凝縮した情報の関連系である世界を演出している。

11-003

存在ー驚愕。

他に代替できず、他を想定することさえできない唯一無二という対を成し得ないつまり絶対性であり、且つ認識の限界を超えていて世界を貫く最大の未知で未規定な、この 「存在」 という地平のなかで、これも全く未知で意味不明な不可思議な論理を絶した世界ー内ー存在者として、今まさに「現在」存在している自己が、「ここにいる」 ことに直面している。
未知で不可思議で規定し難い存在の下で、同じく未知な自己が存在の地平に存在せしめられている。

私は、世界ー内ー存在としてのすべての存在物を巻き込んだ、存在の存在による存在化のための自己展開を生成している「時間」 の真っ只中に現に投入されており、その生成消滅の地平に被投されているところの、世界ー内ー存在者である。

私自身がそういう「現実」に貫かれた存在者であることに、そういう次元ー形式の超越的な構造内に被投されて居るということに、改めて、心底からの驚愕を憶える。
と同時に、論理を絶した論理的解釈の極限に「現に今」置かれている状況に眩暈を覚えずにはいられない。

そして驚愕しない者は、その存在の事実を真に経験してはいない。

私は真に何を「見ている」のか？、
私は、絶対的無二性であるところの、存在の自己展開の顕現を見ているのである。
しかし「ひと」は、日常的な人間に固有な社会的通念という曇った眼鏡で現実を見ているのが実際であり、その事に気付くのは、自己の存在に関わることが起きた時のみであることは否めない。

11-009

＜カント＞

（カントの純粋理性批判・先験的原理論冒頭から。）

・「どういう仕方どういう手段で認識が対象に関係するにしても、いやしくも認識が対象に関係する場合に、両者の直接の媒介をなし、すべての思惟が手段として求めるものは「直観」である。・・・・・

我々が対象によって触発される仕方を通して表象を得る能力を「感性」という。したがって感性を媒介として我々に対象が与えられるのであり、感性のみが我々に直観を生ぜしめるのである。これに反し、悟性によっては対象が思惟され、悟性から「概念」が発生する。けれどもすべての思惟は、端的（直接的）であろうと迂回的（間接的）であろうと、（ある標識を媒介として）究極においては直観へ、したがって我々にあっては感性へ関係しなければならない。なぜならそれ以外の方法によっては、いかなる対象も我々に与えられないからである。

我々が対象によって触発される場合に、対象が我々の表象能力に及ぼす結果が「感覚」である。感覚を通して対象へ関係する直観は、経験的と称する。経験的直観の漠然たる対象を「現象」と称する。現象のなかで、感覚に対応するものをわたしは「現象の質料」と名づけ、これに反し、現象の多様を一定の関係に秩序づけられ（直観され）うるようにするものを、「現象の形式」 と名づける。」

・空間と時間に関して。　　純粋理性批判、「先験的感性論」。

第一節。　空間について。

我々は外部感官を媒介として、我々に対して対象を我々の外にある対象として表象し、かつこれらの対象をすべて空間において表象する。
内部感官は、それを媒介として心が自分自身を、或いは自分の内部状態を直観するものであるが、この内部感官は、勿論1個の客観としての魂そのものの直観を与えるものではない。しかしそれはやはり、その下にのみ魂の内部状態の直観が可能となるところの、一定の形式である。
したがって内部的規定に属するすべては時間関係において表象されるのである。
時間が外的に直観されないことは、空間が我々の内なるあるものとして直観されないのと同様である。
いったい空間と時間は何であろうか。　それは実際に存在するものなのであろうか。
それはなるほど単に物を規定するもの、或いはまた物の関係に過ぎないものとしても、しかし物自体にも物自体は直観されないだろうが、それにも拘らずそのような物自体にも属するような規定なのであろうか。
それとも、単に直観の形式のみに固着した規定、したがってそれを欠いてはこれら空間と時間という述語がいかなるものにも付加されることができないような、我々の心の主観的性質にのみもっぱら固着した規定であろうか。これを明らかにするためにまず空間という概念を究明しようと思う。

（1）空間は外的経験から抽象された経験的概念ではない。

ある感覚が私の外なる物に関係せしめられるためには、・・・・・空間という表象がすでに根底に存しなければならない。それで空間という表象は、経験によって外的現象の諸関係から借りてこられたものではなく、この外的経験がそれ自身、空間という表象によってはじめて可能なのである。

（2）空間はあらゆる外的直観の根底に存する必然的な先験的表象である。

・・・・・我々は、空間中にいかなる対称も見出されないということは充分考えることはできるが、いかなる空間も存在しない、という表象は決してつくることができない。
したがって空間は現象が可能となるための条件とみなされるもので、現象に依存して規定されるものではない。必然的に外的現象の根底に存するところの先天的表象である。

（3）空間は、物一般の関係に関する推論的な或いはいわゆる一般的概念ではなく一つの純粋直観である。

我々は単に唯一の空間を表象できるのみで、・・・・・一切を包括する唯一空間に先立って、いわばそれの構成要素として先行することはできず、単にその唯一空間の中において考えられることができるに過ぎない。
空間における多様、したがって諸空間一般という一般概念は、もっぱら諸制限の上に基づいて立てられるものである。このことから帰結されることは、空間という直観に関しては、先天的直観が一切の空間概念の根底に属するということである。
かくして、すべての幾何学的原則も、・・・・一般的概念からは導き出されず、直観から、しかも先天的直観から必当然的確実性をもって、導き出されるのである。

(4)空間は与えられた無限の量として表象される。

・・・・いかなる概念も、概念そのものとしては、あたかもそれが表象の無限の群を自らの中に包括するものであるように考えることはできない。しかるに空間はそういう風に考えられるのである。
・・・・したがって、空間という根源的表象は先天的直観であって、概念ではないのである。

・空間概念の先験的究明
幾何学は空間の諸性質を総合的に、しかも先天的に規定する学である。空間に関してこのような先天的総合認識が可能であるためには、空間という表象はそもそもいかなるものでなければならないのか。

空間は根源的直観でなければならない。なぜなら単なる概念からは概念を超え出るような命題は引きだされないが、幾何学にはこのことが行われるからである。
けれどもこの直観は先天的に、すなわち対象についての一切の知覚に先立って、我々の中に見出されなければならず、したがって純粋直観であって、経験的直観であることはできない。

ところで、客観そのものに先立って存し、客観の概念がそこにおいて先天的に規定できるような外的直観は、いかにして我々の内に内在できるのであろうか。
それは明らかに、この外的直観が客観によって触発されて、その触発によって客観の直接的表象、すなわち、直観を得るという主観の形式的性状として、したがって単に外部感官一般の形式として単に主観のうちにその座を有する限りにおいてのみのことである。したがって我々の説明のみが、先天的総合認識としての幾何学の可能なゆえんを解明するものである。

・上述の諸概念からの結論。

(a)　空間は何らかの物自体の性質を表すものではなく、また物自体の相互関係を表すものではない。

即ち、対象そのものに固着していて直観の主観的制約がことごとく捨象されてもなお残るような、物自体の性質ではない。なぜなら絶対的性質も相対的性質もそれが性質である以上は、それらの性質が帰属する物の存在に先立っては、したがって先天的には直観されることは出来ないからである。

(b)　空間は、外部感官が持つあらゆる現象の単なる形式に他ならず、換言すれば、その下にのみ我々に外的直観が可能であるような、感性の主観的制約に他ならない。
・・・・だから我々は一個の人間(感性的)たる立場からのみ、空間、延長物について語ることができるのである。
もし我々が、その下にのみ外的直観が得られる、すなわち対象によって触発されるところの主観的条件が不用だとすれば、空間というこの述語は意味を持たなくなる。空間というこの述語は、物が我々に現象する限りにおいてのみ、すなわち感性の対象たる限りにおいてのみ、物に付加されるのである。
・・・・空間は、我々に対して外にあるものとして現象しうる一切の物を包括するが、物自体についてはそれが、いったい直観されようと、されまいと、或いはまたいかなる主観によって直観しようとされようとも、空間はこれを包括するものではない。

空間において直観されるものは総じて何物も物自体ではなく、空間は、物に、いわばそれ自身として固有であるような物の形式ではなく、我々には対象自体は全然知られておらず、我々が外的対象と称するものは我々の感性の単なる表象以外の何ものでもなく、この感性の形式は空間であるが、感性の真の相関者すなわち物自体は空間によっては全然認識されず、また認識されることも出来ず、物自体はかえって、経験においては決して問題とされないということである。

第二節。　時間について。

四。　時間概念の形而上学的究明

(1)　時間は何らかの経験から抽象された経験的概念ではない。
なぜならもし仮に時間という表象が先天的にその根底になかったとすれば、同時存在とか継起とかは知覚として現れもしないだろうからである。時間という表象を前提としてのみ我々は、若干のものが同一の時間に(同時に)存在するとか、別々の時間に(継時的に)存在するとかいうことを表象できるのである。

(2)時間はあらゆる直観の根底に存する必然的な表象である。
我々は現象を時間から取り去ることは何の困難もなく出来るけれども、現象一般に関しては時間そのものをなくすことは出来ない。時間は従って先天的に与えられたものである。時間においてのみ、現象が現実に現れるとということがすべて可能なのである。現象はことごとく消滅するということはあり得る。しかし時間そのものはなくされることは出来ない。

ヤスパースもハイデッガーも、カントが展開する地平を受け継いだなかで、各々の独自の展開を行ってきたと言えるのではないか。

世界－内－存在者としての現存在の生物学的存在物としての立ち位置からの対象の認識に関して、
カントの空間論、時間論に関しては、現代科学からすれば、とのように解釈することになるか。

現実は、私自身が、この意味不明な空間のなかで空間の領域を排他的に占有しており、互いの占有状態が、共可能性が、同一空間を二つの物体が占めることを禁じている。
というライプニッツのいうところの共可能性の条件の下で存在しているのである。

まず我々は、世界－内－存在者としての生物学的存在物であることの再認識から考え直す必要に迫られているのではないか。そういう枠内での限界状況の中において対象に対しての認識作用を行っているということを前提にし、意識することが肝要なのだろう。

以上のように、我々のもつ悟性や概念は、世界－内－存在として存在化、顕現化された我々に与えられた固有の世界知、世界認識の形式であって、普遍的なものでは全然ない。ということだ。

世界－内ー存在としての、且つ被投的存在者である人間は、付与されたあるいは生物系としての人間の自己組織化のなかの進化の仮定で創発された感官による対象の、現象としての表象を人間仕様に翻訳し、変換し、射影され次元転換された「物・事」を認識するにすぎず、その本源的なそれ自身（それ自体）を把握する、認識することは不可能であり、人間の感性に与えられた形式により表象できるのみであるため、存在化された時点で既に限界が設定されている。
存在を帯びまたは付着された時点で限界境界のなかでの自己認識、対象認識という次元を背負っている。
ヤスパースが謂うところの「限界状況」である。

そして、人間存在は、絶対に「それ自体」を知ることは出来ず、先験的経験論が展開する空間に住まう、被投的－世界－内－存在者である、ことをカントは純粋理性批判のなかで言っているのである。

カントが下記のように書いているように、「対象自体」、「対象そのもの」 を知ることはできない。

・たとえ我々の直観を、最高度の明瞭性へ高めることが出来たとしても、対象自体の性質により近く迫ることはできないであろう。

・対象そのものが何であろうと、我々にはその現象のみが与えられるのであるから、その現象を如何に明瞭に認識しても、対象そのものは決して我々には知られないであろう。

このことは、現代においても、そのまま何も変わることがない真理である。

そして、実存はそれらの限界状況の外にその根源を持っているのである。

私は、固有空間を占有している排他的空間のなかで、どっぷりと浸かっている存在者である。
これは驚くべきことである。
存在化、顕現化空間に組み込まれている唯一無二の絶対性を帯びた、あるいは絶対性に付着した、絶対的歴史性である。

11-010

＜ライプニッツ＞　　「二十四の命題」から

一。 なぜ無ではなく、なにかが実在するのか。 ・・・なぜ何かほかのものではなく、むしろこのものが実在するかという根拠がなければならない。

四。 それゆえ、なぜ実在が非実在より優勢であるかという原因がある。
つまり必然的存在者とは、実在せしめるものである。

六。 それゆえ、全ての可能的なものは、それが現勢的に実在している必然的存在者に基づいているのに従って実在しようとし、かかる必然的存在者なしには、可能的なものが現勢態に至る道はないということができる。

他の項目は現代科学の成果と相容れない項目（考え）が多い。

この命題は、ハイデッガーが「ニーチェ」のなかで、存在との関係において極めて重要な問いとして位置付けそれへの解釈をおこなっている。私はこのハイデッガーの著作からこの命題を知りえた。
最大級の問いであることを私も認識している。

ライプニッツを語るときに詮議されるもの。

・充分理由の原理。
「無ではなく「なにか」が存在する。ーーすなわち、どこかで(現実における）存在は本質の構成する論理的な体系から生じる必然的なことである。ーー充分な理由があるに違いない。」

存在という事実が本質の世界に在る必然性である。

・ライプニッツの「充分理由」と、スピノザの「必然性」
ライプニッツの宇宙においてもスピノザの宇宙においても、論理的必然性は絶対的ではあるが、ライプニッツにとって必然的であるのは価値の実現である。
つまり、充分理由の原理は、存在できるのはたった一つだとしながらも、この一つは考えられる最善なものである。

スピノザが充満の原理の実現は、必然であるので善とも悪とも呼び得ない。と主張したのに対してライプニッツは、その実現は必然的であるながらも最高に善であると主張した。
スピノザは宇宙の必然性の思想の方に、充満の思想よりも関心があった。ライプニッツはこの弁証法の両面に真実の関心があった。そして宇宙の「充満」の観念にいきいきした想像力に富み、感情のこもった満足を感じていた。

・「さてこの宇宙の存在の充分理由は、経験的真実の連続の中には発見され得ない。・・・・他のどんな理由も必要としない充分理由は、経験的事物の因果的連続の外にあるに違いなく、必然的なものであるに違いない。・・・・」

・共可能性の観念。
現実に存在するどのような宇宙も、単に自己に矛盾しないだけではなく、他と互いに共存できるものから成立しなければならない。
存在は論理的な意味で可能なものだけでなく、共可能なものに限定されなければならない。
可能的なものすべてが存在を獲得するわけではない。共可能性がそれらのあるものを除外するから。
共可能性の規則が、同一空間を二つの物体が占めることを禁止していると仮定する。

・宇宙の選択。
無数にある宇宙モデルの中のうちの一つだけを創造できたことがあったに違いない。

具体的存在物が生じる前に「選択」すなわち、セットの中から一つを「選択」、すなわちセットの中から一つを選択すること、それと共にこのセットに属さないものすべてを排除することがなされた。
この選択の行為が存在する宇宙の観念そのものに論理的に必然的に含まれている。

・”事物の根本的な起源”。
「宇宙の万物は、単に幾何学的のみならず形而上学的な永遠の真理の法則、すなわち物質的のみならず、形相的な必然性に従って生起することを我々は現に知る。そしてそのことは、何故宇宙が存在するか、何故こんな風に存在するかの既に説明された理由に関して一般的に真実であるのみならず、我々が詳細な点に及んでも、形而上学的法則は全宇宙において不思議な風にあてはまる。
・・・それ故に、本質と存在との両者が真である究極的な理由を、宇宙そのものより必然的に大きく宇宙より秀れ先行する一つの存在の中に、我々は有する。」

・ライプニッツの充分理由、スピノザの必然性。 万物が永遠で殆ど幾何学的必然性のスピノザ説と同意である。
アーサー・O・ラブジョイ。

・何かが何ゆえ存在するか、つまりその本質が現実存在を要求し、他の本質が同様な要求をして妨げない限り現実存在を獲得する究極的な理由は一つしか有り得ない。そして現実の宇宙のもつ他の抽象的に考えられる宇宙すべてに対する優越性は、この宇宙においては、本質の現実に存在しようとするこの「傾向」が他のいかなる宇宙よりも多く実現されている事実にある。現実存在への欲求はすべての本質に内在する。 本質のこの性質の中に現存在への或る種の「傾向」がなければ、何も存在しないであろう。
アーサー・O・ラブジョイ。

・可能な宇宙の中から現実の宇宙が存在するのと、最大の重みをもつ潜在的存在を持つ宇宙が必然的に現実態に押し出されて来る、ほとんど機械的な過程の結果として表現することをためらわない。
アーサー・O・ラブジョイ。

・充満の原理と連続の原理。
物質があるとすれば、それは連続的でなければならない。
物質があったかも知れないが現に存在しないような空なる場所はあり得ない。つまり、物理的な真空は無いと考えた。

「単子論」のなかで、
「宇宙は何も休まず、何も不毛ではなく、何も死んではいない。」、
「もし真空があるとすれば、そこで他の物を損なわずに何かが造られたかも知れない不毛な休閑中の場所が残ってしまう。しかしそのような場所が残るというのは英知と矛盾する。」
「宇宙のどの一片のなかにも、無限の被造物から成り立つ世界が含まれている。」

・「偶然的な真理はすべて究極的にはアプリオリな、または必然的な真理に還元され得る。」

・「空間」は単に「共在の秩序」、実際には延長のないものが互いに感覚的に現れる形に過ぎない。

・宇宙の造り主は、全てのことを意志して行うことと全く合致する意味において「自由」である。

※私はライプニッツの言う、「選択」、と「傾向」は、K・ポパーの「潜勢」、ニーチェの「意志（権力への）」、と相通じる観念ではないかと考える。
現代物理における自発的対称性の破れの機構による真空期待値の生成を引き起こす或る「傾向」、「潜勢」との間の関係は如何に。

11-011
＜スピノザ＞
「エチカ」 第一部。 神について。 全体についての検証。

・神、創造主の存在を前提に展開する。
言ってみれば時間、空間は既に自明なものとして存在しており、それを前提に展開しており、いわゆる背景非依存ではない。

・存在するからには必然として原因があるとする、短絡的な見方に思える。
最初に何々ありき、という宗教的な臭いを感じる。

・スピノザの「エチカ」を観ると、私は何か心理的なある種の嫌悪感的なものを催す。宗教的独善のようなものを感じる。つまり「独善的な形而上学」をそこに見る。または「乱暴な形而上学的必然性」。

・論理的な整合性があるように見えるが、そこには根本に教条的宗教的なもの、恣意的に誘導するものが見える。または無意識な思い込みがなせる捏造的なものを感じる。

・公理、定理において、強引な結論付けと誘導のようなものを感じないわけにはいかない。
矛盾を強引に自説に誘導しようとする意図的なものが見える。

例えば、　　<--- ： 私の考え。
定義。 実体とは、・・・・その概念を形成するのに他のものの概念を必要としないもの、と解する。
<---: ここで言う実体は、存在・・と見てよいのだろうと解する。

公理六。　真の観念はその対象（観念されたもの）と一致しなければならない。
<---: 一致することはあり得ないし、不可能である。射影としての近似である。

序文　－　1.

世界と超越性としての存在。

意識をもっており、自己を対象として意識し、自省し、同時に共在する存在物、対自としての他者が存在することを意識し認識できる存在がいてはじめて存在は意識されるのである。
また、そういう存在を意識する主体が居てはじめて存在が意味をなすのである。

情報と物質のコヒーレンスな関係、物質と環境の相互作用、それらから触媒（自己触媒、相互触媒）と、それらから創発するハイパーサイクルによる情報の回路的凝縮、濃縮過程のなかから自己組織化し、自己制御し、外界と相互作用して情報を蓄積しフードバックし、自己複製、自己増殖を推進し自己展開するところの非平衡散逸的開放系としての生命が発現してきたのである。

我々の知る限りでは、物質といってもその本質は情報によりエネルギーが形態化した波動なのだが、そのエネルギーの凝縮としてのソリトンとしての物質は、クオーク→核子→原子→分子→高分子→アミノ酸、核酸→原核細胞→単細胞→多細胞→・・・→・・・・。 と偶然ではなく必然的に自己発現してきたのである。
それらの段階の間には、臨界点に達した数量、種類の創発から自発的に発生する相転移、自己創発が発現し、それが更なる情報集積の回路を造り、上位のハイパーサイクルの発現へと繋がる。

傾向性が濃縮され、その繰り返しの回路性によって生物という、自己統制し且つ外部との情報共有、受信送信の情報伝達、保存、そして学習が可能な機能と構造を有する組織系が自己生成されたのである。
我々自体を何の先入見もなく客観的に観察すれば、実に奇妙な形態と構造と器官を有している。複雑怪奇な機能と構造を有するフィードバックする情報組織であり、実に巧妙な自己制御、対外制御を行うということに圧倒されるのである。この生物はその形態も機能も構造も宇宙的である。

この重力の閉じ込め相にあるこの惑星の社会的、常識的観念に縛られた思考では及びもつかない宇宙的次元の産物である。生命であれ存在する全てがである。
そしてその生命は、自己を意識し、他者を意識し、存在するすべてのものを意識し、そして存在そのものを意識している段階にあるのである。

謂ってみれば、存在という世界－形式の下で存在するものが存在するのであり、意識する主体は世界－形式の「内」に於ける世界－内－存在である。
そして存在は世界－内－存在としての存在を意識する主体の存在により、存在は意識されるのである。

意識されない存在物に存在の意味がないことからくる必然的な存在の自己－展開と自己－実現が起きている。つまり、世界－内－存在として存在という世界－形式のなかで存在を意識する自省する意識体を自己の内部に生成することによって自己－完結するという自己循環的回路の中に存在するということができるのである。

そして存在の許においては、存在は唯一無二の比較を絶した絶対性であるから、存在を帯びた存在にすべてを貫かれている存在物（おそらくこれは包括的概念でいうところの情報であろう） は、自己回帰的－自己循環的な無矛盾からなるな完全性、完璧性を有しているのである。
それは存在以外に存在はないという存在の唯一性からくることである。

その存在－情報が存在の自己展開の場である時空を時開し、空開して増殖させた自開－場のなかで存在物に継承されているのである。この継承があるから存在を意識し気付ける存在物が創発してくるのである。

我々は出生することにより、この世界－形式の色を帯びたのであり、世界－内－存在として存在物として組み込まれたのであり、そして滞留している間は、この世界－形式の許で織りなす情報とその表象との自己浸透、相互浸透を通して意識する自省する世界－内－存在は存在を想うのである。

だからこの存在の許で滞留する意味は、存在するというそのことに意味があるのである。この世界－形式の許で存在し、存在に気付き、存在を意識することに意味があるのである。
そのことに自己覚醒した実存は、おおいなる聖なるこの現実のなかに至高なる動的なる芸術を経験するのである。自己無矛盾なる完璧性としての完全性として永遠を現存在に見るのである。

私が見ている対象は、存在の許における存在するもの、存在することであり、私が見ることによる情報相関により、我々の意識にそのその相関による反照が発現する。
我々はそれを見ているのである。

存在に対する意識も同じ主観－客観－分裂による相－相関から創発するものであり、世界－内－存在者である私の存在への意識により存在の回路的な自己完結が実現しているのである。
そのこと自体は紛れもない奇跡であり、存在していることは途方もないことであり、実存はそのことによって自足するのである。

だが、世界－内－存在としての存在物は徹頭徹尾、存在に貫かれているが、存在の意味を問うことをする存在物の発現を促進しているような存在による存在化の自己－展開がなされているように見える。

そして存在の強制的な地平－形式性の中ではあるが、存在物の自己選択性、自己組織化性、自己実現性を許容するようになっているように見える。でなければ存在物である自己および存在と存在物の形式を俯瞰視できる実存的覚醒は生じない。

実存はそれらの形式－構図を超えて飛翔する。そして実存はすべてにおいて芸術性と美と聖性と超越性を見ようとする。

そして、実存は、すべて存在するもの、存在することには完璧性と完全性と必然性がなければ存在し得ないことを知っている。

完璧性、完全性を帯びた自由性という超越性。世界をこのように見やるのである。

序文　－　2.

存在と自己展開の必然性。

存在の許での存在化には、生成の相としての時性の形式の許で現存在が現成することである。
そこから始まるという起点としての、生成自体の有する相としての時性があると想定するのである。
そして起点として、そこから生成が開始するという時性と空間としての特異点を想定するのである。

生成と時性という存在の自己－双対の許で、存在の自己－双対としての存在物化が生じ、自省し、
存在を意識し、存在と存在物の区別が概念的に思惟できる存在者が発現するまで、つまり存在の
意味が自己－実現し自己－完結するまで自己－展開する必然性があるのである。

存在化したものが非存在化し自己回帰するという過程においても、情報の保存性から情報が消滅
することは有り得ないのであり、次の存在化のプロセスへと継承されていく。

存在することは動性としての時性の許で存在することであり、存在という概念はそれらの時性を内に
含んだ、存在の自己－双対な概念であるが、存在それ自体は時性を含んでいない形式概念である。

我々、存在の許に含まれる存在物からすると、空間は存在が自開する場として必須のものとして
考えるのであるが、空間自体は情報の相変化した或る包括的な概念としての情報そのものである
可能性がある。そしてその包括的概念としての情報は、存在を継承している存在－情報である。

存在－存在物の区別の地平においては、全ての概念は融けてしまい、存在－情報の射影、様々に
見せる相貌が、見る主体自体の特質、個性に反照した表現で顕れるところの、自己－反照の世界
であると表現できる。

実存はそれらの相貌、表象の全体に対し、自覚し決断し覚悟する決意性そのものである。

序文　－　3.

存在の無規定性、唯一性、と非度量衡性。

存在の無規定性により、存在を定義し規定することはできない。
存在は他に比較することができない唯一性としての対が絶えているという絶対性であり、絶対的
超越性なのである。

もし存在を定義することができたとなると、例えばこの世界のように定数化され固有値化されて認識
でき、度量衡的に世界定位された唯一の世界しか存在しないことになる。

それは存在は、存在以外に存在はあり得ないという絶対的唯一性として、我々の概念からは思惟
不可な概念であり、数、量などの度量衡的概念が意味をなさない。つまり我々の概念では無限という
概念で、世界は存在の許に在ることになるのである。
その意味においてマルチバース、多宇宙という概念はあり得るということになる。

存在のように、それ以外には存在が無いという構図、形式とはどういうことか。

一つは、境界というものがない。これ以外に存在しない以上存在の境界は存在しない。
この点においても我々の理解を超えている。

我々が存在を定義するときには存在物のように対象として定義できないということである。

序文　－　4.

存在と自己双対。

存在に自己双対としての存在物を存在化する衝動と自己展開の駆動に意味があるとすれば、その意味は、我々には意味も目的もなく存在する、生成するということは想像できないのであるため、そこには志向、衝動、強いて謂えば目的（と表現するしか表現できないのであるが）が存在するのだと考えざるを得ないのである。

そのことにより、存在は自己－完結し、存在の意味が意味を持つのであろう。
それは、存在自身を認知するための認識体の創造にあるのではないかと考えるのである。
存在を意識されなかったら存在の存在することの必然性と意味はどこにあるというのだろう。
と我々の次元の意識する者は思うのである。

我々は科学により自己と対自としての環境や共在するものを客観的に対象化し、主体としてそのことを認識しているという状態を客観視し、意識できる存在である。
そしてこの自省し、存在を意識する実存意識によって、存在は自己－完結するのである。

存在する一切の存在物はその存在を意識されることによってその意味が在るのであり、存在は実存覚醒し存在を意識できる存在物の存在によって意味を持ち得るのである。
実存覚醒する存在が存在するということは必然的なことであり実存者によって意味が完結するのである。

自発的対称性の破れから一つの世界（宇宙）が選択され、世界の時開、空開が始まり、空間から存在物が存在ー情報を継承して発現される。

存在は存在化のための情報を蔵しており、そして存在物が自己双対として存在の意味を成すのである。
存在物が無いと存在は意味を成さないからである。
その存在化のための情報が存在物の形態を形成するのである。

存在化情報を推進する機構と存在物との自己推進的なフィードバックによりそれらは展開していく。
それは存在の自己－展開である。

光子→クオーク→核子→原子→分子→高分子→生体高分子→・・・・・・→多細胞→・・・・→人間
そして現在は自省する存在を意識する存在物としての人間種へと存在－情報は継承されてきた。
自省段階に到達した人間種の進化レベルは自己認識、主観－客観－分裂していることを自己認知しているのである。
そして存在を意識している実存覚醒の段階にあるのである。

存在の支配下の内部から生成した存在の自己双対としての存在物によって、自己－意識、認識者による存在意識への自己完結的回路を作るためと謂うしか表現できない。
言い換えれば、存在の自己実現のプロセスによる自己超越という意味を自己完結させる。その過程プロセスを我々は進化プロセスと謂う。

存在が意味を求める衝動、自己回帰する衝動として存在の自己触媒的な存在化が進化を駆動しているとも謂える。

我々の生命プロセスが全包括的な宇宙のダイナミクスと連動して”意味”を求める自己超越の駆動力になっているとも謂える。

そして世界－内－存在としての存在物は、存在－情報を内に蔵した存在－情報の顕現した存在するものである。これは我々にとっては超越的な現実であり、我々自身の超越性、共在する存在物の超越性を圧倒的な直接的現実性として顕わにするのである。

我々自身が測り知れない超越性の顕現であること、超越性そのものの受託であることを実存的に歴史的絶対性として意識するのである。

存在－情報－場の領域にある情報自体が存在物である。そしてその情報をすべての存在物は帯びている。空間はもちろんその情報と双対である。

12-019

存在とは表象以前の根元のものであり時間という概念とは次元的には無関係である。
存在は存在物の有り様と空間という概念とは本質的に無関係である。
つまり次元の異なることであり、存在が自己展開、自己開示のために時間、空間を自己生成した
ある一種の自己開示、自己展開による表象である。
その表象以前の超越的世界構造の大元である。

存在とは最も根元的な概念である。同時に最も言表不能、解析不能、一瞬たりとも存在物にとっては
必然的なものであるが、生成物には最高度に隠蔽されており、現存在にとっては余りにも溢れている
ことであるが、悟性にとっては最高度に難解であり壁があり次元的境界を持している。

存在は存在物のすべてを統べている形式、背景形式の構造性である。
考えうる限り最も根元的な形式と見える概念である。
現存在としての人間にとっては概念としか言い様がないが、最も根元的な現前である。
現前化せしめるものである。
あらゆる人間の概念を創発させるあるもの、あること、である。

マルチバースが存在するとして、それも存在という高次元な総括的構造性の下でのことであり、
それも存在の枠内でのことである。

存在物の有り様を世界定位しても限界を厳然ともつある形式的、根源的枠組み。
だが言語と概念による表現が果たして可能とは思えない。

世界定位の概念から根元から外れている。
根元的認識限界を超えている。しかし現前している。

存在を存在物と区別できるのは意識的直感としか言えない。
そして何故存在が有るか。でもこの言表には矛盾がある。
存在があるのではなく、在ることが存在である。

時間、空間の存在物の世界定位により存在は捉えられないし、そもそもそれは主客逆転である。

宇宙がどう有ろうと存在自体を究明することは全く次元の違うことである。
存在と存在物。存在物から存在への接近は最初から限界がある。
存在物、思惟、意識、あらゆる無形、有形の存在物が拠って立つ根元的次元。
そして時空背景のなかで厳然として現体化されて現前化されている。
そして存在物自体は存在という存在の根拠たる背景に貫かれている。

存在とは認識ということができる対象ではない。対象化は自己撞着に陥る。
存在せしめられており、人間としての分相応な質料を与えられ、その限界の形式的構成性の構成因子
である存在物が存在を認識できるとすればそれは矛盾である。

ゲーデルの不完全性原理になぞらえば、

・ある存在をあらわすある構造があるとしても、その構造のなかでは存在は見極められない。

・数学的構造それ自体では自己完結した完全な論理体系になりえない。

存在と生成という概念は関係がない。存在は有るという地平そのもの。
存在は有るということが問題になるのであり、いかにあるかが問題なのではない。

表象として捉え得るのみである。そしてその表象に顕現の志向性、と意志性と見えるものを見る。

存在の有化への志向性。ここにおおいなる暗号を垣間見る。
暗号の解読の鍵はその意志の表象であるこの現前の中に在るはずだ。
完璧に完全に浸み込んでいるはずだからだ。
すでに解読するまでもなく白日の下に現前していると言ったほうがいいだろう。

－－－－－－－－－－－－－－－－
存在物に対する概念の外挿による誤り。

12-062

ニーチェの権力への意志、シポフの構図、と自己組織化と、。

絶対無から、Prime Vacuum, Vacuum が生まれ、Prime Vacuum からPrime Tortion Field が生まれ、
Vacuum から素粒子、気体、液体、固体。
無（Absolute Nothing　0=0 ） からの発現衝動、宇宙の加速度膨張との関係は？
自己組織化とか、ニーチェの権力への意志、・・・等々との関係は？　ありやなしや。

ニーチェの”権力への意志”の619. にあるように、「・・有機的生命のすべての機能をこの唯一の源泉
から導出することも同じく可能である。」 と言っているが、
その「権力への意志」は、絶対無（0＝0）からの量子真空の顕現と関連しており、また宇宙の加速度
膨張により”内的意志”というふうに映る、つまり射影された概念かも知れない。
宇宙内のすべては存在の地平から免れることはできない。

だが存在しているという 「この他にはなく、このように存在している」 ということは、次元的にその上に、
それらを包み込んだ存在のトポロジー的に存在物を顕現させる地平・構図の問題があるように思われる。
ニーチェによれば、そのように考えること自体が形而上学から引き込んだ考えなのだということだろうが。

存在　→　存在物の顕現の衝動をニーチェの「権力の意志」と考えることもできる。
シポフ流にいえば、絶対無　→　量子真空　→　存在物の顕現。 そこまで起源を遡れるかもしれない。

「存在」という地平・構図、次元・構図のもとで、生成が、存在物の事象の生成・消滅が決して止むことなく
起きている。存在と生成はこういう相関があり、その逆ではない。
だが存在は人間の認識の枠外のことである。悟性の及ぶところにない。

存在物の有り様としての「法則性」に関しては、ニーチェの論を検証すべし。
生成についても然り。存在のもとで存在物は「存在の内的衝動」により、存在のもとで生成の展開を
してゆく。

ニーチェの”権力への意志”は、いいかえれば、顕現化への潜在力（ﾎﾟﾃﾝｼｬﾙｴﾈﾙｷﾞｰ）、顕現後の
専有化（同化）傾向のもと、ということになる。
それは、加速度膨張するこの空間の増大、増殖化と同じことが起きているのではないのか。
ニーチェは複雑化、二分化、形態化、・・・などは、或る内的衝動の動きとみている。

660.　複雑性の増大・・・・権力の増大。
それは、意図的にみえるように存在の地平・構図にある人間悟性に射影されていると思われる。
いわゆる現代の人間原理と似ている概念である。

663.　意図にもとづくすべての生起は権力の増大の意図へと還元されることができる。
そうなる本質がみえない目的化した動きとみえるための意図があるとみなす。そこに神の存在をみると
同じことがおきている。

また、存在の存在化にみせる、「志向性」、「意志」 と感じられるものは、K・ポパーが、量子論の解釈で
言うところの”傾向性”、と似ていることを感じる。「傾向性」に関しては概略次のように書いている。
・傾向性は、物理的実在である。
・頻度への解釈の修正。
・量子力学での、ϕ　関数は、決定論的事態をではないが、現実の事態、傾向を除述している。
　事実態が決定論的ではないという事実、この不完全性は不確定性の反映なのである。
量子力学の分野でこうも書いている。
・ハイゼンベルグの「不確定性原理」は、ある公式の誤った解釈であり、その公式は統計的分散である。
　ハイゼンベルグの公式は、測定に適用されるべきではない。
・・・・・・・分散関係は、量子力学的な系の準備に関係している。ある状態を準備する場合に、我われは
　常に共役的な分散を持ち込む。

12-063

ヤスパース と ハイデッガー
ヤスパースとハイデッガーには、ある共通のものもあるが、歴然と乖離しているものもある。
ハンス・ザーナー編、”ハイデッガーとの対決” には、ヤスパースから観たハイデッガー観には、
厳しい批判が見える。また両者の考えには相当な根本的な違いがあることが伺われる。

「現存在」と、「実存」の、意味に対する解釈の違いが既に最初から2人の間にはあった。
ハイデッガーでは、存在了解をもつ存在者、つまり人間が「現存在」と呼ばれ、その現存在の「存在」が、
「実存」と規定されている。
ヤスパースは、「現存在」を、「我われである包括者」の一様式、「物質、生命的身体、心、意識」等、
「自然的、日常的ありかたをした外的な自己としての人間の表示」に用い、これと倫理的に自覚された
本来的自己とを区別し、現存在、意識一般、精神等に存在意義を与える根拠、根源である「実存」を、
「現存在」と区別している。

1. 行き詰まったのか。継続し得ないということは、この技巧的な創作物の本性のなかに宿っているのか、
それ以外は、ただアフォリズム、ささやき、－－約束のみ。
「存在と時間」の中絶に対して、彼自身の与えた理由は、彼の創作に対して全体的意義をもつのか、
彼には真の劇的転回、徹底および再生が欠けている。・・・いかなる真の解明もなく、・・・いかなる
体系的堅固もなく、・・・たえざるプロセスとしての自己克服もない。

2. 「存在」について、ハイデッガーはなにしろ、それが、言葉のなかに住むとしか言わない。
それから先はすべて比喩なのである。すなわち・・・存在の「明るみ」－－「番人」－－「牧人」 など。

3. 存在概念によせて、
ハイデッガー「存在と時間」は、・・・現存在解明でありながら、実存解明なのであり、両者ははっきり区別
されていない。最後にこの哲学は、実存開明でありながら、超越作用なのである。
・・・ハイデッガーの哲学はこれまでのところ、神を欠如し、世界を欠如している。事実上独我論的である。
「決意性」の強調において、一本調子であり、盲目的である。
ハイデッガーの図式。

・おのれに先んじてあること。	・既に世界の内にあること。	・もとでの存在
了解		
企投	被投性	
実存	現事実性	
到来	既在性	現在
		状況
決意性	情状性	頽落
	不安	

4. ハイデッガー 「形而上学とはなにか」
簡単に言えば、ヤスパースは、ここで言われていることは、矛盾だらけで、言葉の遊びであるということを
言わんとしているのだが。

・全く、不明瞭で恣意的である。
・・・・一つの哲学的思惟であるかのように---一瞬そう思われるのだが、すぐさま、それは消え去ってしまう
のである。---ハイデッガーはたしかに何が問題なのかは知っており---その点では、おそらく、公認された
哲学者のなかでは今日唯一の哲学者であろう。しかし問題は、その本来的なものを彼が掌中に捉えて
いるか否かにある。・・・・彼は混同している。ひどい論理的な混同ではなく、また、混乱をきわめた混同
でもないが、むしろ、実存的な混同である。このことが叙述の形式の威力によって、覆いかくされている
のである。
・・・・言葉遣いの独特な文章であって、---読者を驚倒させたり、無理に引きずり込んでいく。こういう叙述
形式は、さしあたり、形式としても、どんな哲学的思索もみな陳述の際に狙う必然的目標ではあろう。
けれどその叙述形式は、究極の基準ではないのであり、ごまかしとなることもあるのである。

・そこでは、「厳密さ」が重んじられ、「学」としての哲学の伝統が引き継がれ、現象学の流れがある。
果てしないものに向かっての冒険はなされないのである。・・・次のような戯れからは切り離されねばならな
い。すなわち、つねに現存在と実存、存在と自由とを混同し、それをごちゃ混ぜにして言明しようとする
戯れが、それだ。・・・・

・根拠のない不当な前提がなされている。「形而上学的問いはすべて、いつでも形而上学の問題群の全体
を包含する」と。・・・形而上学は総じて全体となることはないからである。
・・・・次のように問うことはなんの正しい意味もない。－－－「思考があるから存在があるのか、それとも
存在があるから思考があるのか、」 といった問いがそれである。

というのも、我われは、ここで限界に触れているからである。そしてこの限界においては、・・・・一方が「他方
によって」 問われることは、もはやできないからである。

それゆえ、思考と存在とは同一である。（哲学的な限界思想）
化石が存在するがゆえにのみ、古生物学が存在するのである。我われにとって存在するのは、思考のなかで対象性を得るものである。（これは限界思想であると同時に、心理学的確証である。）

5. ・・・まるで、ある底なしの愚かさが、すべての明敏な区分にさいして、本質的な区別を実存的に見逃しているかのようだ。
・私は彼からほとんど何も学ぶことができなかった、---
理性と愛とのより高度に明確な把握と、暗号世界の言語への聴従に向かって、私は、彼から遠ざかった。

6. ハイデッガーの出す発問と疑問は、存在と称される或る関係の中心点から、すべてのものを相対化し、事実上否定するものである。ところが、この関係の中心点というものが、曖昧なままに留まっている。その中心点は「無」なのである。・・・その中心点は否定するにはうってつけである。

7. 117。
ハイデッガーの思索の前景をなしているもの。
哲学的思索にさいして現代の学問を排除すること。このように現代学問を素通りすること。学問は、普遍妥当的ではなくて、歴史的過程のなかで基礎づけられた認識作用であり、しかもただ単に、事実上歴史的であるばかりでなく、学問自身の意味からして時間的な認識作用であるという見解を取っていること。

何故、この7のハイデッガーのスタンスが敵対関係の材料として挙がるのか、よく解らない。
簡単に言うと、ハイデッガーはどこまでも敢て先達の蓄積成果とは袂を分かち、未知の領域に既に入ってしまっていて、存在の深淵を垣間見たという自負があり、存在と存在物の本質への決意性が私には見える。その自分の存在にたいする観点から、存在という視点で先達の言葉を批判的に位置づけようと試みているように感じられる。特に、著書「ニーチェ」において、ライプニッツ、ニーチェ、に関してそれが言える。
そして、”神学的なキェルケゴールの情熱とは深淵をもって隔てられているもの。”と記している。
ヤスパースに対しても同じことを言っているのだと思われる。

ハイデッガー著、「ニーチェ」

16章。存在すること。
存在者の存在性における支配的根本性向となる〈現実性〉のなかには、作用が、そしてひいては原因性がある。〈現実性〉のなかには成就があり、この成就は、自らの中に、ある固有な一体性から現成する表－象作用と志向を隠している。このように規定された成就はひとつの自己－成就であり、・・・・・・、確実性のあるところには意志が、意志のあるところには自己を意志することがある。
・・・・現実性としての存在性が示す意志本質には、形而上学には決して見極めることができない仕方で作為（作成）ということが隠されている。

17章。
九。 キェルケゴール的意味における実存。ただしキリスト教信仰としての自己存在、すなわちキリスト者であることへの本質的関連なしに。他者との交わりに発する人格としての自己存在。（超越者）との関係における実存（ヤスパース）

十。 実存－「存在と時間」のなかでは、ときどき、現－存在の現の明るみのなかでの脱自的な緊迫として用いられている。
存在の真理のなかでの緊迫。それは存在論的差別、すなわち、存在者と存在の区別付けという明確な基礎づけの上で成り立つ。（一切の形而上学と実存哲学の外側で。）

18章。
四。「存在と時間」における現－存在の性格としての実存。（存在史）
ここで意味されているのは、キェルケゴール的概念でもなく、実存哲学的な概念でもない。
むしろ実存は、現－存在を、それがもつ存在真理への卓抜した連繋の点から解釈しようという意図から、現－存在の脱自的なものへの帰りゆきにおいて思惟される。
ひとえにこの問いによって「存在と時間」における実存概念のひんぱんな使用は制約されている。
この問いは、形而上学のひとつの超克への準備を整えるものにすぎない。このことすべては実存哲学および実存主義の外側に属することである。それはまた根底においては神学的なキェルケゴールの情熱とは深淵をもって隔てられたものであり、むしろ逆にどこまでも形而上学との本質的対決のなかに踏みとどまるのである。

第5章。 ライプニッツ。現実性と表象作用の共属性。

存在とは、自－立することへと一体化しつつ自己－成就すること、自らを－自らの－前に－もたらしつつ（表象しつつ）自己自身を志向することである。
自己成就への志向、実在への衝動、・・・・実在自体が、自己自身の希求を挑発するという本質を有している。

12-064

時間があるわけではない。
すべてが存在と存在物という場合の存在物すべてが、生成・消滅の因果の変動の世界であり、それが存在の下で起きている。
存在は、固定したものではなく止まることなく変遷している存在物の存在を統べている。
存在物自体が固定した概念ではない。
己自身もその存在の下における存在物である。だが、存在と存在物との関連構造を識別できる不可思議な、形容しがたい或る存在物である。

存在物はすべて空間的構造体であり、空間という形式、属性が必須のものである。
存在物とは占有域が変動する空間的構造体であり、そこには元もと静止という概念はあり得ない。
生成、消滅、相変化、構造変化を一瞬たりとも止めることはない。その存在物を在らしめている地平の形式としての存在として、固定化された概念としてイメージすることが不可であるところの不可解なものとしての存在。

相転移し凝縮しているところの存在物としての世界。
固有値化している、あるいは凝縮している存在物の世界を統べている、あるいは包摂しているところの存在。
存在という静的形式としての概念で捉えられている。その形式の地平の下での決して静止することがない生成・消滅、転変する存在物の世界が在るように捉えている。

存在という概念は創発した概念か？
あるいは錯覚としての概念か？
しかし意識は存在を直観的に感じている。
決して静止することのない生成・消滅、流転する存在物の世界が「在る」ということを感じている。
この「在る」ということが、存在という概念を創発している。

最も抽象的であり、且つ最も具体的であり、最も大きいと同時に最も深い概念である。
そういう概念を生じさせ得る、内在させ得る、創発させ得る、という存在という概念を含んでいるという事実。
生成・消滅、流転のなかにあって、静止している地平としての存在として包摂している存在という概念。

生成・消滅、流転しかない存在物の世界のなかに絶対静止としての、つまり永遠としての存在を感じるということの不可思議性。
簡単に言えば、存在物の世界とはエネルギーの転変、相転移としての世界である。
エネルギーとは、生成・消滅、流転させ得る衝動力、潜勢力の表現としての概念である。これは生物学的な概念であり、もっと根源的には存在的情報を言い換えるべきだろう。

存在が存在物の世界に自らを顕現しようという潜勢を持って、顕現の場としての「もの」を生成しながら、存在物をその内部に顕現し、それが更に潜勢となって、次々と因果作用的に自己展開していく。
顕現の場が我われのいうところの空間であり、存在と空間の関係は思惟にとっては根源的に限界的である。
存在物の世界とは、そういう存在的情報の因果連繋、連鎖の世界である。
そして、それらはすべて、何の例外もなく、存在という下で起きている。

決して変動止まぬ生成と動の世界を、絶対的永遠、絶対的静としての存在がすべてを貫いている。
永遠は常に実存的瞬間において成就している。

存在は自発的な相転移を起こし、あまたの潜勢の可能性のなかから、この一つの存在物の顕現の自己展開を自発的に選択した。対称性の破れを自発的に起こした。
存在は無限の数に自己展開している。そしてその数は存在にとっては無意味である。

生物的な獲得形式が織りなす概念としての存在と存在物の世界。
その概念化も存在と存在物の連関の下での存在を帯びた必然性としての存在情報の或る一形式である。

存在の自己展開場としての空間、何故空間という一つの存在情報としての形式があるのか。それは存在と不可分な形式あるいは相なのか。

存在の顕現化としての存在物の或る自由度。
存在は自発的相転移において空間凝縮を起こしたようだ。それが次元だ。

12-065

それらの多くの複雑な論理である理論も、既に、現実に実現し、顕在しているものであり、論理数理で、
それらを、忠実に模写しようとしているのである。
忠実にとは、人間悟性から発生する論理、概念の形式から模写することではあるが。
それらは、果てしなく進んでいくであろうが、果てしなく本質は後退していく。

既に、すべてのものが、今、此処で、実現されているという、いまさらながらの臨場の驚きがある。
実在とは、かくも奇跡的であるということだ。

ヤスパースが、哲学Ⅲの形而上学で言わんとしていることと同意だ。

・暗号としての現存在は、完全に顕在するもの、絶対に歴史的なものであり、これはかかるものとして
「奇跡」である。

・暗号として現実は奇跡であり、即ち今ここで生起するものである、というのは、このものが普遍的なものへ
解消しうるものではなく・・・それが超越する実存に対して存在を現存在において啓示する故に決定的な
重要さを持つからなのである。従ってあらゆる現存在が、それが私にとって暗号になる限りにおいて、
奇跡である。

・・・・全体は恒に、把握されるべきものや、説明されるべきものより以上のものである。

・暗号によって私は、私の現存在のこの場所に即する私の実存的可能性の深い意識を保持するのである。
そして、私が存在を不可解なそれとして暗号の中に見てとるということに、・・・・・
自己存在の安らぎを覚えるのである。

・研究には際限がない。研究にとって前提として妥当するのは、世界が始源も終末もない無際限なものと
して時間的現存在であるということであり、この前提を廃棄することは考えられないのである。

・諸々の分裂の諸統一は暗号の解読において見られるが、そうするからといって、我われは、現存在から
解き離された一つの存在を捕捉できるなどということはないのである。それ故に我われはまた、何故に
存在が現存在するに至るのかという問いに向かう出発点にとり着くこともない。

・回想と予見とは、存在に至る私の通路であるにすぎない。それらにおいて私が暗号を把握すると、両者は
合致する。回想されるものは、予見のなかで改めて獲得される可能性としての現在である。予見のなかで
捕捉されるものは、回想されたものとしてのみ、充実されたものでもある。現在はもはや単なる現在のまま
ではなくて、回想に浸透された予見のなかで、私がその中で暗号を解読する場合には、永遠の現在と
なるのである。

・暗号における超越者は、過ぎ去ったものとして将来から私を出迎える存在であり、或いは、予感しつつ
回想される存在である。従って、存在は円環をなして閉じている。---時間的にただ経過するものは、
存在においては還結しているのである。

・人間は、自分にとって自然であり、意識であり、歴史であり、実存である故に、人間存在はすべての
現存在の結節点－－－そこであらゆるものが我われにとっては結び合わさっており、そこからして他の
すべてのものが我われにとって初めて捕捉可能になるところの－－－である。
人間はあらゆる世界を超え出て超越者へと連繋している。
人間は、最も遠いものがそこで相会する存在の中間項と考えるべきである。世界と超越者とは人間に
おいて縺れ合い、彼は両者の境界に実存として立っている。
人間が何であるかは存在論的に定着されえない。人間は決して自己自身に満足することなく、いかなる
知にも拘束されず、自身にとって暗号なのである。
人間が超越者に最も近く来るのは、彼が暗号としての自己自身を通して超越者を見てとる時である。